

腎結石物語

その1. 腎結石編

私は金はできないが、石はできる。しゃれのようなが、よく石ができる医師である。純炭素で出来た石だったらなと思うが、まったく光らない硝酸カルシウムなどである。

5年ほど前に私は尿管結石で入院をした。それこそ、患者さんの裁判官関係の書類を非常に急いで作成していて、最後を一気に仕事場に泊まりで明け方までかかって仕上げた。ところがそれからまもない明け方5時半になんとも言えない腰背部痛で眼が覚めた。それまでもときどきキリキリと十数秒の痙攣が走り、しばらくその余韻が残ることは何度もあったが、それは仕事をしているうちに忘れてしまう程度のものであった。そういえば、その夜中に必死でパソコンに向かっている間にも少し、確かに前兆はあった。

しかしその時は、どうやらおさまるところか、じっと横になっていられない痛みとなり、歩くのにも響く。必死でパソコンを打っていた仕事場の2階からト

イレのある階下に降りようとした所、階段を降りる振動がしこたま響いて、とてもではないが普通には降りられない。異様に脂汗まで出てきた。

肉眼的血尿はなかった。落ち着いて、ブスコパンを飲んだ。しかし時間とともにそれが取れるどころか、明らかに時間とともに右腰背部が張ったようにずんずんと痛くなってきた。これはどう考えても尿管結石である。

まだ暗くて家族が起き出すまでには少し時間があるし、この痛み方にはそのまま家に帰ることに一抹の不安もあり、どうせならもう少し仕事を片付ける時間があるので、診察室の中の書類の方に目を通したり、患者さんの書いたものを読んだりしていた。イヤな予感的中し、時々刻々確実に疼痛は増強し、家に帰るところではないような痛みに発展してきた。体をまっすぐにして歩く事もできない。

間違いない。右に体を側湾させてそろそろと歩き、二階の麻薬金庫の鍵を取りに階段に足を踏み込んだ途端、嘔気がこみ上げ、後ろに後ずさりして、トイレに嘔吐した。そのあとは、体に振動を与えないように這って階段をあがってやっと金庫の鍵を取り、その後はまた後ろ方向に這いながら、またやっとのことで階段を下りた。

ペンタジンを打ち、一旦15分ほどおさまるかに見えたが、どう考えてもおさまるところか、1時間後には医師の判断で2回目のペンタジンを打った。

覚せい剤を打つ人の、『目的の為には痛みなど感じない』ということを感じた。しかしこの手段も、さすがにこの腎臓の被膜の過伸展と思われる『腎臓が裂けそうな痛み』には有効とは言えなかった。

鍵を取りに、又それを返しに2階に往復することが膨れ上がった腎臓を振り回した形となって嘔気がこみ上げ、途中でトイレに立ち寄ったり、バケツを持って移動した。迫る入院の危機が頭の中を駆け巡る中、その日の予定の患者やそれ意向のことを手短かに職員にたくさんの指示を書きまくった。ただただ時間と痛みとが競争し、泌尿器科医のK先生の診療開始を目指して私は死にもの狂いであった。

「これでよし・・・！」

これまでも確か、どこかで何度もこんな確認は経験済みだ・・・出産のために参院に向けて家を出るたびに、そうだ、4回ともこんな確認をしたなあ・・・と思いながら、痛みがいくらか緩んだ隙間で入り口のシャッターを必死で何とか下ろした。気持ちは急ぐが、腎臓に与える振動を必要最低限にするために可能な限り緩やかに歩いた。駐車場までの直線の道が砂漠のように長かった。

車の運転席に乗り込んで、思わずシートを倒し、ふう・・・と一息ついてから、どこまでシートを挙げれば何とか車の前の道路が見えて、運転できるかと角度を調整している間も痛みはやはり、満ちてくる波打ち際の潮のように容赦がない。

やっとハンドルの間から目だけ出しているような、人が見たら驚くような角度で、何とか運転をし始めた。膨れ上がった腎臓への振動を恐れ、記憶をたどって、見覚えのある段差には一つ一つブレーキを踏み、交通安全の神様が守ってくれる事を祈りながら、まだ車の往来の少ない七時過ぎのとおりを普段よりも5分多く、15分もかけて運転した。駐車場の枠入れには、再後の力を振り絞って痛みと戦いながら、なんとか車を入れた。

あと少し！あと少しで家族のいる空間に戻れる！そうすれば後は何とかなる！

部屋にようやくたどりついた時に、脂汗のまっ青な顔の私を最初に誰が見たのかは全く覚えがない。とにかく台所にいたシルエットのような誰かがびっくりして何かを問いかけたが、それに対し返事はせず、「ちょっとばかり痛い・・・。大変かも・・・。かあさん、今から入院になる

かも・・・」

とやっこのことであわづった声を出し、受診の診察の前に女性のたしなみとして、とにかく入浴をしなければ・・・と思い、浴室に入った。

必死で体をよじるようにして蛇口をひねったあと、何とか衣服を脱ぎ、お湯は貯まっていなかったが、もうこれ以上は立っていらなかった。浴槽の底にあおむけに倒れこんで、お湯がたまるのを待った。

もう動けない・・・誰か助けて・・・早く 8時半が来て、K先生に会えますように・・・！これほど医師の存在を待ち焦がれた事もなく、私は傷みの中で医師を待つ患者の気持ちを本当に理解したと思う。

気が遠くなってくれたら、どれだけ楽か・・・と思いながら、浴槽に仰向けに横たわる私は、気が遠くなるどころか、ふと痛みが少し楽になったことに気がついた。何なんだ、この痛みが軽くなっていく感じは？それも、お湯の水位が私の体の厚さを越えたころからだんだんその感じが始まり、体が浮くほどになった時ははっきりと確信した。痛みが減っている！その謎解きをしながら、その痛みが減っていく感覚に感動した。5分も浮いていただろうか。はっと気を取り直し、これが幻覚でない事を恐れながら、浴槽から出た。大丈夫である。洗髪から始め、順番に洗い終えて、お湯を浴び、立ってみた。体が伸ばせる！

腰背部叩打痛はどうか？ぐぎゃっ！自分で叩いておいて、思わず叫び声を挙げた。全てが消滅したというのはやはり思いすごしであり、本当に全てが消滅したわけではなかった。しかし、立てる、動ける！痛みが減っただけでもすごい！もう一度浴槽に横たわり、考えた。ひょっとしたら体内で尿管が浮遊し、それにより結石のある部の尿管が結石に全周性に張り付いた状態から緩み、その隙間を尿が通り抜けられるようになったのかも。もう一度立って、今度は体を少しゆすってみた。このくらいなら大丈夫である。多少の足踏みもしてみた。いける！すごい！緊満し、なおはちきれんばかりに過伸展していた腎臓の被膜は、絶対に緩んでいる！

「よっしゃー！」

私は後 5分ほど浴槽の中で浮いたあと、浴槽から飛び出し、美容成形のピフォアフターのように表情も動きも違う私に何がなんだかわからない子ども達を尻目に、ルンルンと冷蔵庫を開け、急いで調理に取り掛かった。痛みのない私が台所にたてば、水を得た魚である。もう泌尿器科に受診しなくてもいいかもしれないとまで思った。さっきまでのあれは、思い過ごしか・・・。

あんな事にペンタジンなんか打ったりして、なんと軟弱な自分・・・！

出勤時間までに、どのくらい掃除ができて、どのくらいの料理の下ごしらえが構えられるか。このスリルがたまらない。ところが時間とともに、奇妙な違和感が再出現・・・あの、潮の満ちてくるような感じがし始めた。もう少し、もう少し・・・と家の仕事をやっている間に、また紛れもなくはっきりとあの道筋をたどり始めた。

ここは家だ。ペンタジンはない。しかし、そこには浴槽があった。掃除の為にも残しておいたお湯もあった。

やおらもう一度その真実を確かめるために、急いで浴槽に飛び込む私に、子ども達はわけもわからず、ぼ・お・ぜん・・・としていた。

その後 10分足らずで、私は自信満々に子ども達の前で、背筋を張って登場し、今度は落ち着いて事情を説明し、この奥田式浮力治療理論を教授した。子ども達はわかっただろうか・・・などという余地もなく、私ははっとした。またあれが忍び寄っている。さっきよりは浴槽の時間が短かった為か、早い。私はもう一度やってくるこの満ち潮のような痛みの進行方向に確信があった。入院だ。今度は大急ぎで入院の方針に戻った。

やっとならまだ八時すぎである。K泌尿器科の受付開始には少し早いですが、電話をかけた。非常にありがたいことに、三回の呼び出し音で出てくれた。こういうときは、ちょっとしたことが患者には本当にありがたく思える。

「奥田と申しますが、右の背中が明け方 5時頃から痛み出しまして、痛みが止まりません。歩く振動でも吐き気がし、何回か吐きました。後にお伺いいたしますが、よろしくお願ひします。」

と、素人の言葉で受付の女性に受診事情を・・・浮力治療の事を省いて説明した。やさしい対応の言葉の余韻を耳に残して、心は急いでもう一度浴槽に飛び込み、腎臓のふくらみを減らして 10分後に飛び出し、車に走った。今度はまずまずに歩ける所まで、尿管と腎臓の内圧は軽減していた。

さあ、時間との戦いだ。痛みが先か、K先生のところに着くのが先か・・・。

おりしも、通勤ラッシュの時間帯である。どこまで持つか、ひやひやしながら、最後の数分でもう脂汗をにじませていた。これ以上尿を作らないための水分制限と、交感神経のおかげで、口はからからである。尿が濃縮されて結石が大きくなる？そんな事は今はどうでもよかった。

やっこの事で K先生の医院の駐車場の端に車を止め、階段を数段あがり、受付にたどり着いた時には、もう立てなくなっていた。「先ほど電話を入れた

奥田・・・」と言っている間に、先ほどの階段のおかげでこみ上げていた嘔気が押しえられなくなり、しゃべれなくなった。受付の優しい女性は急いで看護師に連絡し、看護師は車椅子を持って来てくれて、手前に連絡してあっただけあって、即レントゲン撮影となった。車椅子に乗ったものの、敷居をまたぐ振動で痛みで嘔吐が誘発され、そのまま嘔吐してしまった。

「ごめんなさい、本当にごめんなさいね・・・。」

と、もう吐くものはないほど吐いてきた為に、液体だけになっていた吐物を前にして声にならない声で必死に謝った。看護師さんの優しいまなざしと言葉は、声にならぬ私の言葉を理解してくれていた。それから置物のように、恥ずかしいほど盛大に大事に扱われた。

レントゲン写真とともに私はすぐに超音波室に運ばれ、そこにいつもにこやかな K 先生がすぐに現われた。

「大変だったね。」

私は思わず涙が出た。シャーカステンに照らされて明るくなった先生の横顔は、一瞬きりっと締まり、又緩んで私のほうを振り返った。

「・・・レントゲンにも石が出てるね。痛かったね。ちょっと超音波でも見せてよ。ああ、先に痛み止めを打っておこうね。」

手短かに看護師に指示を与え、

「横を向けるかい？ちょっと痛いよ。」

と言いながら、注射を打った。そんなものは少しも痛くなかった。

「あー、腎臓がパンパンだね。上等な水腎症！入院に異論はないよね？」

このときは、あまりしゃべれなかった。だから、浮力治療の話は長くなりそうで話さなかった。簡単に、『浴槽に浮いたら、そのあと少し楽になった』とだけ、何とか話したような気もする。

そのまま病室に運ばれ、水分や食事が取れないことに対して、点滴が開始された。その滴下をベッドの中から見つめながら、これがどうか右腎の尿にはなりませんように・・・と願っていた。

しかし、痛みはやはりじわりじわりと増強し、横になっても身の置き所がなかった。そして、今は石が少しでも溶解するのを待つのみ身分・・・であり、時が早く流れて欲しかった。しかしそうはならず、多少の安堵感でうとうとすると、寝返りによる腎臓の痛みでまた寝られなくなり、寝返りをしないと体が痛くなるし、寝返りしなくても、膨れた腎臓は痛い・・・わたしはどこまでも貧乏性であり、こんなふうにならずと寝ていることなどやはり向いていないのだ・・・この時間の流れを何かに有効利用できないか・・・い

やこの痛みがある限りは体をどうもっていても痛い、医学書を紐解いて頭に入れる事も、落ち着いて何かの原稿を書き進めることなどはできない・・・やはり健康が一番・・・。

目を開けていることにも疲れ、目を閉じて痛みをこらえながら、ぐるぐると様々な思いが頭を流れていった。

ふと人の気配で目を開けると、主人の顔がそこにあった。うとうとしている私の顔を上からじっと覗き込んでいた。思わず涙がこぼれた。

「ごめんね・・・。」

「いや・・・。何かいるもの、ない？」

こういうときは、全てが謙虚にありがたい。とっさにあれこれ思い浮かべた。取りあえず、私の趣味の検定ものの本を持って来てもらった。本も読みたいが、小説だと、内容が細切れになりそうな痛みである。医学書では、看護師さんが緊張するだろう。あくまで素人っぽく素人っぽく。そうである、私は以前に何かで、『分娩の為の入院してくる患者で一番騒いでやりにくいのが女医である』と読んだ。素人っぽく素人っぽく・・・。

大事にされる感覚というものは、子どもでも大人でも人をよい人格にする。我ながらそれを実感した。どこまでも私はこの痛みに耐えようとした。夜 K 先生は部屋に来て、

「つらいだろう。もう少し、痛み止めを追加しようか。」

と止まない痛みを気遣い、又新たな指示を与えてくれた。

そうして翌々日まで、眠れたか眠れないかわからないような時が流れた。食事は取れなかった。

それが・・・である。点滴の刺入部に違和感を生じてきた。それは痛みなどと呼べるようなものには感じられなかった。その違和感に、むしろとある希望が広がり、痛みとは主観的なものだとつくづく思った。十分に膨れてきたから、私はやおらナースコールを握り、押した。

「どうされましたが？」

「ひょっとしたら、点滴がもれているかもしれません。」

「はあい、今行きます。」

軽やかに訪室してくれた看護師は、

「あらあら・・・こんなにも・・・痛かったでしょう？」

と点滴を抜きながら言った。私は

「いや、それほどでも。もう1つの痛みのほうと比べたら、全然問題にならないですから。」

と言うと、笑ってうなずいた。そこですかさず私は、
「点滴をはずしている間に一度お風呂に入ってもいいですか？脂汗がすごくて・・・。」

と思わず息を弾ませて尋ねた。

「そうですね、先生に聞いてみましょう。」

看護師は一旦姿を消し、程なく現われ、

「先生が、どうぞとのこと。入浴が終わったら、又点滴が再開になりますから、声をかけてください。」

と笑顔をおいていった。

私は急いで浴室に転がり込み、蛇口をひねり、浴槽に横たわってみた。お湯の水位が増してくると、だんだんとあのよい感じがしてきた。この心地よさは、どう考えてもお湯の温かさだけではない。自分のたくらみの大成功にうっとり、20分ほども横たわって、それから手際よく体を洗い、そしてもう一度横たわり、かれこれ45分以上もたってから浴室から出た。そして看護師に入浴の終わりを告げた。置かれてあった昼食が、急に食べたくなくて、手をつけた。吐き気もなくなっていた。点滴の新しい針を持ってきた看護婦は

「すごくさっぱりしたみたいですね。」

とにこやかに言葉をくれた。私はそれに対し、

「ええ、痛みもすごく軽くなって、ほら！」

と体を廻旋して見せた。調子がよくなったことを強調しすぎて、看護師は私に、

「元気も程ほどに。まだ石は、出てないんですからね。」

優しく現実的な注意をして、そしてまた容赦なく私を点滴につないでいった。私は

「ご飯も食べれるようになったし、薬も飲んだんですが・・・。」

と点滴に抵抗したが、だめであった。素人として、我慢した。

それから案の定、三十分ほどでまた痛み始めた。せっかく食べられた昼食であったが、夕食は食べられなくなり、又脂汗にまみれ始めた。

夜に訪室してくれた K 先生に、今度は勇気を奮って『浮力の威力』の話をした。

K 先生は否定せずに笑いながら、

「ふうん。」

と聞いてくれた。そこで

「先生、もし夜中に痛くて我慢できなくなったら、点滴をはずしてお風呂に入ってもいいですか？」

K 先生は、更に笑った。

「うーん、まあ、いいかな・・・。」

と微笑みとともにドアの向こうに消えた。普通の病院なら、こうは行かないだろう。K 先生の、この柔軟さがたまらなくうれしいし、温かい。

できるところまで我慢しようとしたが、やはり午前3時ごろにじわじわと痛みが増強し、また我慢しづらくなってきた。思い切ってナースコールを入れた。看護師に、入浴をしたい旨話すと、ちゃんと真面目に話が通っていたようで、即刻点滴を抜去してくれた。私はまた、改善の兆しを浴槽の中で満喫した。長く長く・・・浴槽の中で、本当にゆっくりとくつろいだ。朝日が間近になってきた頃、浴室を出て大きな伸びをし、そして看護師さんの朝の訪室を起きあがって待った。看護師さんは、元気な私の姿にびっくりしていた。朝ごはんも牛乳も、久しぶりに本当においしかった。吐き気も痛みもないという事は、健康とは、本当に素晴らしい。

その日は朝9時から点滴が始まった。そして痛みも徐々に始まった。そして夕食は食べられなかった。そこで又、入浴をさせてもらって浴槽に15分ほど浮いたら、元気に食べられるようになった。

こうして入浴後は起き上がれるようになったが、石が完全に下りる気配はなく、ついに五日目に K 先生は、点滴を受けながら脂汗にまみれている私のベッドに座って、

「T 病院で超音波で結石の破碎をしてみるかい？石が下りるかどうかわからないで、このまま待つのもつらいだろう。保険がきかないから3万5千円ほどかかるけど、やるだけやってみないか。必ずうまくいくわけではないけど、僕がうまくいくように祈るから。」

と話した。患者はこの優しさに弱い。K 先生の言うことなら、なんでも聞こうと心から思った。

「先生がそう言うなら、私、受けます！」

私は痛みの脂汗の中から必死で返事をした。点滴中いくら右腰背部が痛くなくても、点滴を抜去すればすぐにお風呂に飛び込んで浮けば取れてくる痛みであり、私はだんだん痛みの我慢にもプロになってきていた。陣痛よりは長い、陣痛同様必ず終わる死、その間は完全になくなる。持続的な痛みでも、『必ず消失する時間がある』という確約、それも自分が望むときにそれが手に入れられるというパターンは、ありがたいものであった。

「じゃあ、T 病院に連絡して、予約を取っておくから。万一それまでに石が取れてくれたら一番いいけどね。」

そして私は翌々日の午後、T 病院に運ばれた。T 病院の泌尿器科の女性の先生もまた面識のある医師であった。搬送される間の車の振動で痛みと嘔気がこみ上げ、到着して車いすに移動した時には、本当にほっとしたが、そこにすぐに現れた女性の Y 先生はさらに心強かった。

「先生、大変でしたね。」

私は嘔気をこらえながら、

「ここで先生にお世話になれるなんて、すごくありがたい話ですね。」

とやっとのことと言葉を發した。

手短に状況の確認を得、すぐにレントゲン透視室に運ばれ、結石の立体的な位置確認、そして超音波破碎が始まった。ビニルマットに水を張り、その中に腰背部を沈めて超音波を受ける・・・とはいえ、浮いているわけではなく、私はもっと水をたくさんにして浮かべてほしい…と願ったが、ソナコトをしては、二方向の交点を結石に合わせているその位置がずれやすくなるわけで、それはあり得ない事だな…と諦めた。

Y 先生は大学の勤務医時代、患者や疾患のことで話をしているときはシャープでスマートな印象だったが、あれから 15 年はたっている。たまたま数年前にスーパーで、あかちゃんを抱っこひもで抱いた彼女に会ったときの家庭的な穏やかな印象も、私の中にはまだそのぬくもりを残していた。この忙しい T 病院によくおいでられたな・・・と思いながら、彼女の言葉や表情の中に、また

「痛みと吐気は大丈夫ですか？」

と言う彼女の透視室のマイクロフォンを通した声に、医師のぬくもりを味わった。

こうして、私も Y 先生にも大きなものをもらったのである。患者の痛みを知れ、患者の立場に立て、そして患者の病気やけがを治す以前にその傷む心をまず救え・・・と。

結局は、50 分の予定であった破碎術であったが、やはり痛みが強くなり、持続的な超音波のわずかな振動による嘔気から何度も口腔内で胃酸を呑み込んでいたが、ついに限界となり、40 分のところで私は

「ずびばぜん（すみません）・・・。」

と嘔吐をこらえられなくなってしまい、Y 先生の判断で超音波破碎は中断し

た。嘔気にむせびながら、感謝した。

石は頑としてその位置を保持していたが、私はなつかしい Y 先生に会えたとし、また Y 先生に優しく見送られ、幸せな患者であった。

K 先生は、お祈りが通じなくてごめんよ・・・と言ったが、私はその収穫のことを伝えた。又即刻私は浴室に飛び込んで・・・そして浮いた。

その三日後、その朝はなんと、一度も夜中に痛みで起きて浴槽に浮かばずに朝を迎えていた。朝訪室した看護師に、喜び勇んで報告した。看護師も喜んでくれた。改善をともに喜んでくれる人がすぐそばにいる、それは幸せを意味する。

次は K 先生である。午後やってきた先生に体操のようにいろんな姿勢を見せて、「ほら！大丈夫になりました！きっと石は膀胱に落ちたんですよ。」

と言った。尿はすべて、ガーゼでこしているが、石らしきものは出ていないからである。K 先生は、

「そうだといいねえ。じゃあ、レントゲンを撮ってみようかね。」

と言った。そしてほどなく私はレントゲン室に呼ばれ、撮影を受けた。技師さんにも痛みや症状が取れたことを喜んでもらったが、出来上がった写真を見て、技師さんは怪訝な顔をしていた。

夕方呼ばれた診察室へは跳んではねて入った。私は退院という言葉を期待して「先生、もうお風呂に浮かばなくてもよくなりました！」

と言った。K 先生は、シャーカステンを指差して、

「まあ、これ見て・・・。」

とあきらかに笑っていた。じっと見てみると、右膀胱尿管接合部より 12 cm の入院時に石のあった位置以下には、何もなかったのである。その代わり、その 12 cm ほど上に、同じような大きさの石灰化陰影が存在した。石は浮上していた！

ショックでクラクラしたが、立ち直った。

「ま、もう少し頑張ろうね。」

行きと帰りとは大違いの元気さで、しかし歩いて部屋に戻った。痛みがないということは素晴らしい。ここでたくさんの本が読める、勉強もできる。こうなると、手芸道具も持ってきてもらおうか・・・。しかし、とりあえず今持ってきてもらっている問題集を終わってからにしようか、帰りが大荷物になっても大変だなあ・・・。頭の中は早速次の策を練り始めた。

それからの日々はとても元気で食事もおいしく、至れり尽くせりを受けて、

これで外出があれば、まるでどこかのセレブの別荘暮らしのようであった。だいたい問題集も終わってきた元気病日3日目頃、K先生は、「仕事も困るろう。一回帰って、痛くなったらすぐにまた来ることにしようか。」と言ってくれた。家族が来るだけでなく、職員も昼に夕に電話報告を受け、夕方には患者さんからの報告のファックスや手紙束を運んできてくれていた。カウンセリングは入院中も携帯電話で、医療報酬なしに続けていたからである。

翌日、主人が仕事を終えてから迎えに来てくれ、自宅に帰った。子どもたちはよく頑張ってくれていて、家事もそれ以外の自分のことも、本当によくできていたようだ。育児が実を結んでいる！とめでたくうれしい限りであった。家族みんなが私の健康を本当に喜んで迎え入れてくれた。「入院した日に、生まれて初めてかあさんのあんな顔を見たよ。別人になってたよね。」と言っていた。そうだろうねえ、かあさんはあなたたちが生まれてずっと幸せで、そんなに苦悩しませんでしたから。

一週間後に再診であった。再来日まで、私は飲水と入浴に努力をした。うちの看護師と事務員と家族は、懸命に私にコーヒーやお茶を飲ませていた。再診の手続きをし、そのままレントゲン室でレントゲン撮影を終え、レントゲン技師さんは今度は怪訝な顔はせず、その代わりに指で『多分オーケーかな・・・。』と合図をくれた。私はそれをしっかりと受け取った。

もう一度待合室を経て診察室に入ると、いつもの温かさを表情に携えたK先生は、「石は見事になくなっているね。もう入院はしなくていいけど、話からすると、これまでも小さいものがあつた可能性はあるから、気をつけてね。まあ、たまの入院も、君にはやっと休めていいだろうけどね。」と言った。

窓口で最後の会計を支払い終えて、入院の日々への愛着を感じ、一抹のさみしさのようなものを感じたくらいだった。でも、健康はありがたい！家族も仕事もありがたい！私は青空に向かって、大きい伸びをして、駐車場の車に向かった。

それから半年ほどして、夜七時ごろ患者さんから電話が入った。どうやら尿路結石である。はっきりと尿路結石の前歴もあるという。数日前から腰背部がおかしいとは思っていたとのこと。私は、試しに一度浴槽に浮いてみるように、そして改善しなければすぐに来院するようにと指示した。

患者さんは、体や頭を洗ったりしながら、浴室で30分過ごし、1時間後に『痛みも違和感もかなり消失した』と連絡を入れてきた。3日後の連絡でも、良好経過であった。

すべてがこれでうまくいくわけなどはないのだが、一度は試してみてもよい、無侵襲の安価な治療である。理論は簡単、浮遊させた方が尿管官腔の短径が広がり、なおかつ重力の影響が小さくなるために尿管壁も形状を変えやすく、尿管壁の中で結石が移動しやすくなるだろうと思ったのである。

以上